

一休禪の風光

平野宗浄

只今、御紹介に預かりました平野でございます。何か、行学一致という様なお誉めの御言葉を戴いたのですが、丁度丸七年前に、僧堂師家を拜命してからは、デスクワークの方は殆んどお留守になりました、執筆がなかなか進みません。来年から『一休和尚全集』を出すことになって、またあたふたと、一休さんの仕事をやり直しているところです。今回は、「一休さんの話をしろ」という、石川先生の嚴命で御座いますが、しかしながら、私は十年前と殆んど、進んでおりません。私の研究は、そんなに新しいものがどんどん出るわけで御座いませんが、今回は私が今まで、研究致しました「一休さんの風光」というものが、大体どういふのであるか、即ち私の、一休というものを少し皆さんに知っていただきたい、というつもりで御座います。

先きほど、プリントを差し上げたんですが、いろいろの質問は、その度に、お話しするつもりです。

まず、出生の事から出發しますが、一休さんは、応永元年（一三九四年）、一月一日に生まれたというのです。で、歴史の専門家に言わせますと、「年号には氣を付けろ」と言います。「元年は偽が多い」と言うんです。実際にそういふ、可能性は多いようです。おまけに、一月一日ときてるでしょ。だから私はもう、初っ端からこれは怪しい、と思いましたが。応永元年の一月一日という、これでは一が揃い過ぎませんか。大体、昔から年譜の作者っていうのは、大變でっち上げが上手で御座います。それを随分、割引をして勉強しないと酷い目に遭います。前にそう氣を付けながら、私は、研究を続けてきたつもりですけども、やっぱり依怙最負と言いますか、私は一休さんが好きですからね、一休さんの差別思想ってのは酷いもので、それはもう参った、というところがあつたのですが、まあ、それは後で話しますけれども、やっぱり、一休さんは、私、好きでしてね。私のライフワークであ

る、と、今も思っているわけですから。さて一休さんは後小松天皇の子供であるという、ことですが、これが賛否両論なんです。で、今までの歴史学者は、玉村さんを代表として、肯定派が多いようです。「一休さんは、後小松天皇の皇子である」と明言するのです。しかし、私は疑問を持っております、大きな疑問を。むしろ、否定的であります。それから私の先生、(いろんな先生がいらっしやいましたが、)故市川白弦先生はNHK BOOKSで一休さんの事を書いておられますが、市川先生も「疑問だ」と言っておられます。そう言う事で賛成やら、疑問やらと、いろいろ御座いますが、この年譜では、完全に、頭から「後小松天皇の子供だ」と言っております。「母は藤氏で、南朝の後裔だ」と言うんですが、これも、どこまで本当なのか、なんだか非常に、劇的で御座いますね。つまり、南朝の後裔であるその女性がですよ、北朝の、最たる後小松天皇の、「側室だった」と言う事が、そもそもドラマチックですね。それで、その他の仲間が、彼女は「後小松天皇を狙っているんだ、命を狙っているんだ」と言う、「その讒言があつて皇居から追い出された」という話になっています。これも、大変ドラマチックでどこまでが本当で、どこまでが嘘か、非常に疑問の余地のある話ですが。まあ私はこれは大体眉唾物だと思っております。それから、一月一日の、しかも、お日さんの出るときに生まれた、と言うんで

すから、これもね、伝記としては出来過ぎですよ。

先ず、「後小松天皇の皇子である」と言う事、何処が根拠になっているのか、それは、東坊城和長という人の日記がありまして、『和長卿記』と言うのです。これが一番の根拠なんですよ、つまり、歴史学者の根拠と言いますのは。そこで『和長卿記』の一部分を、資料としてコピーして頂きました。これをね、そのまま鵜呑みにしてるんですよ、歴史学者は。少しもテキストクリティクをやってないんですよ。それで、そのほかの内容はどうか知らないけれど、いくら最良目に見てもこれはおかしいと思うんですよ。これは、まあ、飛び飛びに説明しますが、この真ん中辺に「今此和尚、當歳六十七云々、住居攝州櫻塚」とあります。「櫻塚」というのは、大阪府の豊中ですが、此の和尚(岐翁紹偵)はあの辺に居ったという。「秘傳云」とあります。これが、そもそもインチキ臭いですね、「秘傳云」というのが。「一休和尚者、後小松院落胤皇子也」といつている訳ですよ。「世無知之人」とね、これがまた、インチキ臭いでしょ。私だけが知っているんだよ、というのが。次に、「紹一和尚者、宗純和尚」これも、うさん臭いわけですよ。はっきり書けばいいでしょう。岐翁紹偵というんです。これ、あの、一休さんの息子だと、従来噂されてるのは岐翁紹偵という人なんです。で、ここにありますね、「明應三載孟秋中三日」その下に、「岐翁紹

偵印判」とありますね。この岐翁紹偵という人が、一番の問題の人なんです。これは、所謂、一休さんの息子で、「一休さんの印可証明を貰った」と言ってる人なんです。これが抑も一番の間違いの根本なんです。それで、「紹一和尚、宗一和尚」、あ、純は横に小さく書いてあります。この資料は大日本資料です。これも、多くの学者が綿密に編集しているようですが、まあ、何でもかんでも、寄せ集めていう感じで、どれもこれも信用していいというものではないと思います。やはり資料批判というのは大事だと思うのですが、こういう風に資料を集めてくれておりますので、研究する方は大変楽なんですけどね。「和尚實子也」とあります。岐翁紹偵という人が一休さんの息子なんだというのです。噂の根元はここなんですよ。それから、「法之正傳、實親子、奇哉偉哉」これは、一休さんの実の息子でありながら、一休さんの正傳である、というのです。正傳であるというのは、印可を受けていると言う事なんです。これは、実はおかしいと、私は思ったのは次のところですね、「廿二日」「廿三日」「廿四日」というところで御座いますが、この「廿三日」のところを御覧ください、「廿三日、己丑、晴、烏丸安名宗賢、今日即参禅」とあります。「廿四日、庚寅、晴、今日、予参禅」つまり、この東坊城和長とか、烏丸宗賢とかが、岐翁紹偵に参禅しているんですよ。この人達はお公家さんですから、と

にかく、天皇の息子さんという事を有り難がるんです。で、岐翁紹偵が、自分で、これを言ったんですね、「私は後小松帝の皇子である一休さんの子供であり、一休さんの印可を受けている。」と、岐翁紹偵が自分で言ってるんですよ。で、御公家さんというのは、今言ったように、皇室を大変有り難がりますので、「ああ、岐翁さんは、後小松帝の、結局は孫になるのだから」ということになるでしょう順番に言うところから、参禅をすることになるんですよ。ところがですよ、ところが、一休さんは自分の弟子に、参禅とか、そういうことを絶対に許してないんです。それから、印可と言うことは絶対にしていないと言うんです。これは、もう、あちこちで一休さんは言っていますからね。ええ、この、一番はじめの文章はですね、実は一休さんの『自戒集』の中からとっておきます。途中から、一行目の下からですね、「我力存生ノ時タニモ、純藏主カ印可トナル者アリ、我身後ニハ、イカナルヌス人カアリテ、佛法ニキスヲカツケ、祖師ノ頭面ニ悪水ヲカソキタテマツランスラント、ナケカシク存シテ、起請文ヲ以テ申ス、華叟和尚ハ言外和尚ヨリノ印可ナシ、宗純又華叟ヨリノ印可ナシ、モシコノコト虚言ナラハ、諸佛列ソノ御罰アタリテ、」とこう言っています。またその次は、一休さんの直筆の遺戒なのです。これをざっと申しますと、私が死んだ後に、弟子の中で、或いは山林樹下ですね、山へ入って坐禅

したり、或いは居酒屋へ行ったり、女郎屋へ行ったり、そう言うことはまだ許せる、と言うんですよ。ところが、「説禪説道」、つまり禪を説き、道を説き、人の為に口を開く連中は、これが一番、許さんのです。「佛法之盜賊」であり「我門之怨敵也」、とまで言っております。だからですね、禪を説いたり、参禅させるといふのは、以ての外なんです、で、それを、岐翁がやっているという風に和長の日記に明らかに、書いてあります。

それでは、岐翁紹偵という人は信頼できる人か、という事を、私は随分、探し回ったのです。で、実は、岐翁紹偵という人は、初めは、一休さんの弟子であったようでありますが、私が弟子をしておりました眞珠庵の口伝では、破門になって居るんです。で、その証拠の書類、古文書があれば一番いいんですけども、残念ながらそれが無いんです。で、その直接の古文書が無くともですよ、実は、いろんな、古文書類から推しまして、岐翁は一休さんの、弟子の中に入っていないんですよ。皆さんのところには、コピーしなかったんですけれども、一休さんの弟子達は信用の出来る古文書に名前が載ってまして、何時死んだ、ということも、ちゃんと明記されております。で、これは『龍宝山史』にも載っております。しかしそこに岐翁紹偵の名前が無い。それからもう一つですね。実は、一休さんの十三回忌の時の記録です。これ

は、眞珠庵文書という古文書にあるのです。十三回忌ならびに三十三回忌の詳しい記録があります。誰それが、香資を幾ら持ってきたとか、その出席者の人の名前が全部、載っております。その中に、岐翁紹偵は無いんですよ。ありません。彼はまだ生きてる筈です。岐翁紹偵の記録を見ましたら、その一休さんの十三回忌の頃は、まだ元気な筈なんです、名前が無いんですよ。もう一つ、別の古文書によって考察しますと、一休さんは、法度というものを、晩年にたくさん書いておられました、その中に、「わしが死んだならば、わしの弟子はみんな、田辺の酬恩庵に、わたしの命日には皆集まるべし」と書いてあるんです。集まらない者は、来ない者は、擯斥しろ、とこれはわしの弟子から破門しろ、と言ってるんです。これは二つ程、ちゃんと古文書が残っております。直筆のね。だから、そう言う一休さんの考えから申して、やっぱり十三回忌に名を連ねてない、という事は、これは決定的な証拠だと思います。即ち岐翁紹偵という人間は怪しい人物だと言うことです。だから、『和長卿記』の東坊城和長という人はつまり、岐翁紹偵のいうことを丸飲みして信じていたんですね。「私は一休さんの息子だ」と自分で言うもんだから、そして、「私は一休さんの法嗣である」というもんだから、他に何の証拠も無いんですよ。それを、和長さんは信じてこんな風に書いただけの話です。だから、よくよく調べて

みましたならば、『和長卿記』の、この辺は、極めて、危ない、という風に考えざるを得ない訳ですね。そういう、一番大事なところを、大概、『和長卿記』を、日本歴史の先生方は、皆、頭から信じておられるわけで、そこに、私の考えとかかなりの相違があるわけでありませう。まあ、それはそれとしまして、幕末から明治にかけて、全国の御陵の制定という事が御座いました。で、御陵を決める時に、宮内庁の学者が、その頃、「宮内庁」と言ったかどうかは知りませんが、一所懸命に勉強したそうです。そして酬恩庵、田辺の酬恩庵の一休さんのお墓ですが、これを、そのときに御陵に制定してしまうのです。今まで、酬恩庵の管理下にあった物を、宮内庁の管理下にしてしましまして、一般の参拝を禁ずる訳です。で、この時、やはり頼りになった物は『和長卿記』であったらしいですね。一休さんを後小松の皇子であると決めつけるのに、やっぱり『和長卿記』だったようです。そして、「宗純王の墓」と書いてるんです。これには腹が立ちました。出家したら、もう王でも、皇族でも、何でもない筈ですから。もうそれは一休さんが、『狂雲集』の中で喧しく言っております、「出家というものは平等である」と、それを、前出身の身分を、偉そうに言うのは私は大嫌いだ、と、そう、はっきり言っておられます。死んでから「宗純王」なんて付けられるのはね、これは宮内庁の勇み足だと私

は思っております。その、一休さんと後小松天皇は、そうすると関係がなかったのか、と言うとそうではなくて、私の推測では一休さんって言うのは、やっぱり相当、貴族に關係がある人だと私は思うんです。だから、いろんなものを見ますと、土御門って言うお公家さんが御座いましたね。その一族と一番仲良くしておったようであります。で、そういう關係で皇室と何か割合交流はあったであろうと思えます。だから、後小松天皇の御陵に参拝するという偲頌を作っております。後小松天皇に禅の話しをしに宮中に行つたことはあるようです。だから、どうも、後小松天皇とは大変親しかった、と言う事は考えられます。そう言うところからだんだんに後小松天皇の子供だと言う風になっていったのではないかと思われませう。で、まあ、そういうエリートだったと思えます。しかも、母一人、子一人で御座いますので、私はねえ、おかあさんって言うのは偉い人だったと思えますよ。母一人、子一人で、子供を出家させて、六歳の時ですよ。一番かわいい盛りです。おそらくこれは私は真実だと思えますが、そして、しかも、安国寺へ出家してます、と言う事は、エリートですね、やっぱり。そして、あと、五山文学の最後の爛熟期ですか、一番最盛期はちよつと済んで、爛熟期と言つてもいいですか。その頃の五山で、勉強させて貰つてゐるんです。建仁とか天竜寺とかですが、こういう、五山文学の盛

んであったお寺へですね、今で言えば、東京大学とか京都大学という様なところへ留学したようなものですね。そこで勉強させて貰うと言うことは、やはり、エリートでなければ私には出来なかつたことだろうと思うのです。大体二十二歳迄です。勉強を続けております。二十二歳でこの本格的な禅の修行をする訳です。これが、滋賀県堅田の祥瑞寺というお寺で御座います。私が以前二十年間住職をしていたお寺であります。その華叟和尚と言われる方に就いた訳です。ここに、「華叟和尚は言外和尚ヨリノ印可ナシ」と書いてますけれども、これは、実は、在ったんだけど、それは、実は、山崩れで埋もれてしまったという記録が在るんです。ここで約十年修行します。そして一休さんは最終的な和尚さんの看病をしております。これがね、僕らの胸を打つんですよ。最晩年の華叟和尚は垂れ流しであったのですが。その世話をするのは大変ですわ。兄弟子達は皆、それを嫌がる、嫌々やる、それはすぐ判りますね、嫌々そう言うことをやるというのが。で、この、便を拭うのに竹べらを使ったり、紙を沢山使ったり、顔を背けながらやっている。それを見て一休さんは、「そんなに嫌なら私がやります」と言う事で、平氣の平左で素手で、幾ら汚くなるうが涼しい顔して下の世話をされたのです。これはね、私は自分の体験から言いますと、その通りだと思いますよ。私は眞珠庵の師匠の最晩年の弟子であ

りますが、七十七歳で亡くなる時に、もう危ないと言うので僧堂を一月前に暫暇致しまして、その時に雇っていたおばあちゃん、師匠の下の世話を嫌がって、嫌がって。私は、「それなら私がやります」といって、私がやったのですが、全然汚く感じないんですよ、我ながら不思議に思いました。自分が心から尊敬する和尚さんの下の世話をするのはちつとも汚いと思わないんですよ。これがむしろ自分の肉親、父親だったらどうだろう、汚いと思ったかも知れない、と思いませんね。本当に心から尊敬する和尚さんの下の世話をするのは、ちつとも汚いという感じがしない、という実感を持っていますね。だから、この一休さんの話は単なる話ではない、これは本当だったと思います。そう言うことを、後になつて読んでですね、ああ、一休さんは私と同じだったと、本当に身近に感じましたよ。こういう事は、いろいろ本を読むと、或いは古典をみますと嬉しくなることがあるもので御座います。

それから、師匠が亡くなつてからの一休さんは、実に、一所不住なんです。私共の若い頃に前田利鎌という方の『宗教的人間』という本が岩波書店から出ました。これは、十年程前だったかな、岩波文庫から、前田利鎌氏の東大の哲学卒業の時の卒業論文だけを除いて、あと岩波文庫で再版されました、私の学問の師匠である、入矢義高先生が、解説を書いて

出たんですがね、あの論文は、『ファウストの哲学的考察』だったかな、あれはすばらしい論文なのに、何故外したのか疑問なんです。とにかく、前田利鎌という人は、お若い時にしっかりと坐禅、参禅をされた方で、その中に「一所不住の人」という項目を設けてまして、飄々として一所に留まらない、という人を幾人か挙げまして、その中に一休さんを取り上げています。これは私は達見だと思いました。これ、お釈迦さんと一緒なんですね。一所に長く留まらないですよ。京都の南に新田辺という近鉄の駅が在ります。その駅を降りて車で十分か十五分行ったところに薪村という所がありました、そこに実は大應国師のお寺が在ったのを一休さんが、その朽ち欠けてるお寺を再建されました。そこに御自分のお寺を造られましたけれど、酬恩庵と言うんです。亡くなる何年程か前ですが、もうほんの僅かです、そこに結局定住されたのは。亡くなる二年程前でしょうか。それまではもう、あっちへ行き、こっちへ行き、もう留まることを知らないうんです。で、いろいろと面白いのはですね、京都では親しいお公家さんの別荘とか、或いは、彼等の妾さんの屋敷とか、そういう所を借りてですよ、そして修行者達を引き連れて、そんな所で、托鉢したり、或いは、接心したり、やっておったんです。或いは幽霊が出るから皆が怖がって寄りつかんというような空き家。そんな所を儲けの幸いと、借りて修

業場所にしたりました。本当の意味で一所不住ですね。まあ、良寛さんもそういう人ですけども、時代は大分違いますけれど。そりゃあ歴史上そういう方が居られます。曹洞宗には洞水和尚と言われる様な、乞食洞水と言われるこの方も一所不住と言う事で、一カ所に執着しない。この人は徹底していますわね。洞水さんってのはね、弟子を持たないんですから。ところが、一休さんはちゃんと弟子もある。そして完全に逃避したんではないですね、都会から。山の中へも行ってますよ、大阪府の高槻と言う街がありますが、其処から北の山の方へ行ったところにお寺を、お寺と言っても、お百姓さんの大きなお家。お庄屋さんか、その位のお家ですね。それを借りて、其処で修行者を連れて、其処で修業していた事もあります。ところが、一休さんって言うのはやっぱり都会っ子なんです。暫く居ると寂しくなるんですよ、山の中で。それでもう、風が吹くと松がヒュウヒュウ鳴るし、京都の街が恋しくて仕方ない、そうすると矢も楯もたまらず、またバーツと京都へ帰ったりするんです。で、京都に帰ると今度はもう、うるさいでしょう、自分の所へいろんな人が訪ねてきたり。人が面倒だと言ってまた、山へすっこんだりして、あっち行ったり、こっち行ったりするんですよ。これがまた大変人間的でありますね。私もそうです。私も実は都会っ子なんです。大阪の堺という街で、今はね、人口百万人ぐらいの大

きな都市になりましたけれども、私の生まれた時は丁度いい位で御座いました。だけど、都会は都会ですよ。私の家の前は、阪堺線という路面電車が走っていましたからね。そういう街のど真ん中で私は育ちまして、十七歳までは堺で育ち、それから京都へ行って出家しました。大徳寺だって昔は田舎だったけれども、今はもう本当に街の真ん中で御座います。だから、やっぱりちよつと山へ行ってね、当座はいいですよ、当座は、「ああ静かだなあ、もう、都会の喧噪を離れて、いいなあ」と思いますがね、一週間居るとダメですな、やっぱり都会が恋しくなつて。やれ、珈琲が飲みたいとか何とか、煩惱、妄想が出てきまして、もう都会へ帰ってしまひますのでね、こういう、その、一休さん見ると立派な人に違ひないけれども、私共と一緒にやないか、と、何か身近なところを私は感ずるんです。そこはやっぱり一休さんの大きな魅力だと私は思います。そして、好き嫌いは、はっきりしますしね。だから、『狂雲集』を読んでいきますと、まあ悪口は散々言いますね。特に、『自戒集』という本がありまして、実は、あの、『自戒集』っていうのは今まで本当に研究がなされておられません。一番、主著はなんと言つても『狂雲集』なんです。一休さんの漢詩集ですね。これは一千首以上は入っておりますから膨大なものでありまして、これがなかなか今まで完全なものが出来ませんで、来年あたり、この全釈が

上下出来ると思います。ともかく、『自戒集』という本はこれがつつても危ない本で御座いまして、触らないんです、「触らぬ神に祟り無し」とは申しますけれど、それはもう大変な差別だらけですからね、だから誰も触らない。

作家の水上勉さんが『一休文芸詩抄』という本を送つてくれたのですが、ここに初めて『自戒集』を取り上げておられます。とにかく、まともに読めないんですよ。漢文と言っても、漢文の素養ある人間程、読めないんですよ、これは。判じ物みたいですからねこの『自戒集』の、漢詩は。私と仲良くしている駒澤大学の飯塚君なんかの方が、私より良く読むんですよ。『自戒集』で酷いのは、ちよつとこれ、言い出したから先言います、何の差別かと言いますと、癩患者、つまりハンセン氏病ですね。これに対する差別です。凄いですよ。一休さんという人は、兄弟子の養叟と言う人と大変仲が悪かった、これはもう、間違い無いです。それは、『狂雲集』にも悪口を言っておりますし、『自戒集』にも酷い悪口を言っております。あまり詳しく言う時間が御座いませぬので、ザツと申し上げますが、養叟と言う人は癩で死んだと言うんです、癩病で死んだって言うんですよ。で、「これは、前世の罪業でもあり、今生の罪業でもある」というのです。彼は参禅を聞いた、と言うんです。堺で、これは本当か嘘か判らないけれど、一休さんの方ではそう言ってるんです。一

休さんは絶対そういう参禅を聞いたり、説法してはイカン！
と言うのに養叟はやった、と。だから癩病になったんだ、
と、こう言うんです。で、それは何処からくるのかと言いま
すと、先ず、大燈國師の次の方、徹翁義亨と言われる方、こ
の方は一休禅を学ぶ上に大變大切な方でありましてね、大燈
國師のお弟子さんであり法嗣である。この徹翁さんに、『徹
翁語録』というものがありましてその中に、法語というもの
が御座いますが、その中に一休さんの言ってる法語は無いん
ですが、一休さんがもうあまりにも明確に述べているので本
当に在ったんだらう、と思います。一休さんの直筆でもそれ
はちゃんとあります。その中で、「禅を説く者は癩病なる」
って言ってるんです、で、その徹翁さんっていう人を一休さ
んは大變尊敬していました。

一休さんという人はね、決してちゃらんぽらんな人ではな
くて、中国の代々の祖師方や大燈國師、大燈國師、など、尊
敬する人々のことはきちっと、勉強されていましてその方々
を本当に尊敬して居られるんですよ。徹翁さんから言外宗
忠、華叟宗曇ときて、一休さんに来るんですが、宗旨を尊く
思いながらポロカスに言うんです。禅というものは変なもの
で、一番ポロカスに言った時は一番尊敬してる場合が多いの
で、禅の語録というのには読みにくい訳です。ちよっと話しが
こうなつたので、ついでに申し上げたのですけど徹翁さん

が、そういう事を言っているその根本は何か、と言いますと
『法華経』なんですよ。私はこの事を一番初めに判らせて貰
ったのは、横井清さんといまして、花園大学での私の友人
ですが、途中で富山大学へ移りまして今、大阪の桃山大学へ
変わりました。中世の差別思想を研究した学者です。この人
が中世の差別思想の癩差別の根元が『法華経』にあるのだと
いうことを私に教えてくれました、それで私は初めて自分の
未熟さを悟つたのです。いや、びっくりしましたね、『法華
経』というのはこんな差別お経か、ということですよ。つま
り、『法華経』を誇つたりしたらその人は癩病になる、と言
うんですよ。ハッキリ書いてるんです、これは酷いお経で
す。『法華経』というのは、学者の説では、一番根本は僅か
で、それがだんだん増えていったって言うんです。お釈迦さ
んが一番最後に説かれた、お経と言いますが、今に残ってる
『法華経』は全部はお釈迦さんのものではない、と言うこと
のようですが。とにかく、一休さんの頃は全部信じ込んでい
た訳ですね。『法華経』というものは全部お釈迦様が説かれ
たものである」と完全に信じてたと思います。今の様に、学
問が科学的には発達しておりませんから『お経』と言ったら
全部信じてた訳ですよ、偽経であろうが何であろうが。癩を
悪く言っていた『法華経』の、あの部分を、私は、偽経だと
思います。『法華経』は有り難いお経だ」と皆、祖師方が

言って居られますから、昔の人は完全に信じ込んでいたに違いないと思います。これは大きいでしょ、私は、現代の『法華経』の学者の先生なんかの尻馬に乗って、偉そうなことを言いますけども、昔は、そうではなくて、丸々信じ込んでいた。だからこそ、一休さんも勿論『法華経』は読んで居られたに違いないし、癩病患者というものは前世の罪業で、こういう風に病気になったんだと。信じていたのに違いありません。(板書・中座)

私はこれらのことを本山の機関誌に一度書いて、反応が在るかと思ったら、何にも無いんです。つまり、『金剛経』にも業思想があるということですよ。『金剛経』だって、あれは本来の所と、だんだん後で増えてきた所とある筈です。「人々が、人から卑しめられたり、苦しんだりするのは、それは前世の罪業で今そんなに苦しむのだ」というのです。今、人から差別されたり、卑しめられたり、苦しめられたりするところによって、それを耐え忍ぶことによって来世は、今度はいい所に生まれるのだと、こういう論理でしょう。『金剛経』に在るんですよ、それがちゃんと。それをまた、念には念を入るといふか、『碧巖録』という禪の語録集が御座いますが、その中に、「金剛経軽賤」といって、『金剛経』の中のまたその部分を取り上げていますね。人から軽んじられたり、疎まれたり、差別されたりするのは、あなたの前世の罪業が

そうさせている、あなたの罪じゃない、と、あなたの前世の罪業が、前世で悪い事したから、その報いで、今、あなたは、人に誇られたり、差別されたりしているのだと。だからこれは、どうしようもないのだ。だから耐え忍ぶしか仕方無いのだと。で、それを耐え忍んでいけば、今度は、来世に生まれるときは、良い所に生まれますよ、と言うんです。こんな酷い差別がありますか。これを、私が言ったけど、あんまり反応無いんです。私は今、臨済宗の妙心寺派に僧籍がありますけれどね。私は一休さんじゃないけど今まで一所不住ですから、大徳寺派におりまして妙心寺派に来ていますからね。割合気楽に。本山の悪口を言えるし、批判出来るんです。それから、私は、在家出身の人間でしょう。生まれつきの坊さんじゃないんです。さっき申しました通り、十七歳で坊さんに成りましたからね。割合、冷静な目で見られるんですね。だからそういう点では、まずまず自分では自認しているんですが。そんなに、宗門べったりには成らないつもりです。そういうつもりであつてもかなり、身最負をしますけれどね。

御本山は、人権問題の対策を色々やっておりますが。どうも解放同盟に糾弾されない様に、されない様に、とかね、そんな対策ばかりやっている様な感じですよ。本当の意味で、差別というものを根元的に捉えていこう、という意欲があま

り見られないんですよ。私は少し本山の機関誌に書きましたが、あれを没にできなかっただけまだ増しだと思っただけですけれども、まともに取り上げてくれませんので、またそのうちに、もっと厳しい事を書こうかと思っています。

そういう事で、一休さんの、この『自戒集』というものは、敢えてプリントにしなかったんですよ。下手に何の解説もせずに原文をそのまま紙にコピーしますと、これが一人歩きしますから。結局、どこかへ撒き散らされる、という、自然にそういう事に成る訳で、そうすると、差別の助長という事に成る訳ですから。それは、最も気を付けなければならぬ事である訳です。こんなもの、何時までも、誰も手を着けなければ、何時まで経っても良くないので、私は、これはなんとかしなければならぬ、と、最近、決心がついたのですが、なかなか仕事が進まないんです。私は、世の中の仏教の坊さんの中で、一番好きなんですけれども、それでも、差別思想は許せない、というね、それはありますよ。それは。敢えて言っておきたいんです。そこで、時間が、段々無くなってきましたので。一寸、『狂雲集』のところを見て頂きたいと思います。この「抹香を嫌う」のところ、少し読んでみたいと思います。「作家の手段 孰か商量せん、説道談禅 舌更に長し。純老は天然 殊勝を悪む、暗に鼻孔を擧ぐ 仏前の香。」と、これは、私の読みなんですけども、まあ、現代語

訳しますと、真の作家の手段を、商量っていうのは、やりとります。一体、誰がやりとり出来るだろうか。禅の話をしたというのは、自分のことです。一休オヤジでも訳しますかね。一休オヤジは、生まれつき、最もらしい人間を憎むと言ってますよ。この「殊勝を悪む」というのは、私の訳では、最もらしいという風に訳したんです。最もらしい人間を憎む。「仏前の香」にも窃かに鼻孔を擧ぐる程、私は抹香臭いの嫌いだ。これ、好きなんです。私。私も抹香臭いのが大嫌いで。これは養叟に対する批判が暗にありまして、養叟だけではなくて、何時の時代でもそうなんです。仏教臭い、抹香臭い坊さんを批判している。まあ、私ながら良いなあ、と思っております。

次ですね。二つ並べて百四十番と四百五十五番ですが、これは実は、若い修行僧達を本当に心配していると言いますか、だからこそ、一休さんには大勢のお弟子さんがあったという事ですね。これを一寸読んでみます。「(虎丘雪下 三等の僧 二種) 少林の積雪 心頭に置く、公案円成す 上等の仇。僧社に詩を吟ず 剃頭の俗、飢腸 食を説くもた風流。」これは、『大慧武庫』という宋代の禅の語録に見られるもので、大慧禪師は次の様に言われたとあります。円通秀禪師という人が、雪の降る日に遊びに行っただけです。自分の友達

僧堂へ。そうすると、雲水の修行僧はその日お休みで、何をしても宜しい、まあ我々でも、昼寝も出来るし、洗濯をしたり、どんな本を読んでも良い、そんな休みの日があるんですが、その中に三種類の坊さんが居たというのです。一番上等の者は僧堂で坐禅をしている。

これは、達磨さんが少林寺に居た時。二祖慧可が、雪の庭で自らの臂を断つて達磨に法を求めた、という、これですね。それを思い出しながら、この雪の燦々と降る中、寒い寒い禅堂で坐禅をしている。休みの日にも拘わらず、これが一番上等だ。こんな雲水が居るのかというのです。その次、中等は、墨を擦って、筆を執って、雪に因んだ詩を作っている。これは、「僧社に詩を吟ず」ですね。

「僧社に詩を吟ず 剃頭の俗」というのは、詩を吟ずるのは、頭を剃った俗人だと、昔から言われまして、それでもまだ増しだ、言うんです。中位だと。

一番下等の者は、囲炉裏を囲んで食べ物のお話をしている。

そういう風に大慧武庫ではいつています。最後の「飢腸 食を説くもた風流」は、お腹がぺこぺこに成る。食べても食べても、若い頃はお腹が空きましたが、友達とね、食べ物のお話をするのは楽しみですよ。お腹が減ってる時に御馳走の話すると益々お腹が空くんですけれど、それは楽しかったですね。しかし、これは下等だと、大慧武庫では言っておりま

す。これを一休さんは、「飢腸 食を説くもた風流」と、持ち上げてるんですよ。お腹を減らして食べ物のお話をしているお坊さん達、これは一番風流じゃないか、と、一休さんから見たら本当に親しみをもたれたのでしょうか。可哀想になあ、お腹を空かせて食べ物のお話をしている、と、だから風流。

『狂雲集』の中では、「風流」という言葉が一番多いんです。で、「風流」というのは、解釈すると話が一時間位掛かりますが、なかなか含蓄のある「風流」でありまして、良い意味の「風流」ですよ、これは。色っぽい意味の「風流」もあります。ここでは大変高度な、高級な意味の「風流」であります。これは落ちこぼれを一番助けてやりたい、という、そういう一休さんの慈悲心というのがあるんですね。一休さんは、若い頃、堅田にいる頃は、大変お腹を空かせて苦労したことがありまして、そういう経験から、こうした慈悲心が生まれてくる。私は一休禅の一番素晴らしいところだと思います。

次の「(病僧に五辛を与う。) 病僧の大苦 傷風を発す、死脈 頻々として命終わらんとす。如来の新病 牛乳を用う、忌む莫かれ凡身 薬草の葱。」これを訳しますと、病気の修行僧が大変重い病気に成った。「傷風」というのは、感冒のことです。きつい、ひどい風邪でしょう。昔は質素な食事でしたから、風邪でも引いたら大変です。「死脈 頻々として

命終わらんとす。」もう、しきりに脈が乱れて命が危ない、可哀想だなあ、という訳です。

「如来の新病 牛乳を用う、」お釈迦さんさえ、病には牛乳を用いられたではないか、というのです。つまり、お釈迦さんが、まだ苦行しておられた頃。まだお悟りを開いていない時に、苦行を捨てて、尼連禪河で沐浴をし、村のスジャータという娘の捧げる牛乳を飲まれた。厳密に言うとな乳じゃないんですが、一応ここでは牛乳とします。これは、戒律では許されなかったんです。婆羅門教では、牛乳は絶対、飲んではいけない、と。ところが、お釈迦様は、その戒律を破つて、氣力・体力を回復された訳です。そこが大事なんですよ。戒律を破ってさえも、健康の為には、本当の悟りを求める為には、戒律を破ってまで、お釈迦様は牛乳を飲まれた、ということですね。よく読むとそうなります。

そして、「忌む莫かれ凡身 菓草の葱。」これは、況や凡人の我々がこの様な病気の時には、薬になる「五辛」を忌み嫌うべきではない、と、こう言ってます。「五辛」といいますのは、五つの辛いと書いていますが、これは、やっぱり戒律で禁じられていた食べ物です。印度の「五辛」と中国の「五辛」と日本の「五辛」は少し違っていたようですが、大体は、韭・浅葱・野蒜・葱・大蒜と、所謂、臭いものです。しかし、健康に良いんですよ。何故、戒律で禁止されている

たのか、色々想像出来るんですが、あれは、臭いですからね。臭いというのも一つの理由かもしれません。お経を読む時、仏様に臭い息を吹きかけてはいけないと言う人もありますが、でもやっぱり、元気が付きすぎるというんではないんですかね。ひよっとしたら肉や魚を食べるよりも、韭・大蒜・葱食べた方が元気になるかもしれませぬ。そうすると、その、戒律というものは嫌らしいですね。人間が元気になったら、煩惱・妄情が起るから、これはいけない、という根性が嫌らしいじゃないですか。やっぱり元気になって修行しなきゃいけない。だから一休さんはハッキリと言うんですよ。戒律で禁止されているが、私は戒律を破ってまでも私の弟子達の健康の方が大事なのだ、というのです。この精神がね、一休禅の根幹を為していると思うんですよ。ここところが本当に私は一休禅の真骨頂だと思えます。

まあ、基本は解って頂いたと思うのですが。最後に、辞世ですね。『一休遺偈』というところです。「須彌南畔、誰會我禪、虚堂來也、不直半錢。」これが、一休さんの遺偈なんです。実は、直筆が御座います、「須彌南畔」というのは、この俗世界ですね。須彌山の南ということですから、この俗世界に、一休の禪が、一体誰に解るだろう。「虚堂來也」というのは、虚堂、來れり、と読まないといけないですね。よく虚堂が来て、それは「半錢」にあたらず、と読んでます

が、それは誤りで、やって来た、ということですよ。つまり、「半銭」の値打ちも無い虚堂さんがやって来た、ということですよ。やっぱり、死ぬ最後まで、虚堂さんが気になってた訳なんです。書を書いて、虚堂七世純一休なんて書いてですね、一休さんは、虚堂さんに心酔しておりました。それで、最後になって、いや「半銭」にもあたらな、死ぬ間際になったら、「虚堂なんて半銭にも値しないわ」と、もうこの、死ぬ間際になったらそれでしょね、「虚堂さんどころじゃないわ」というようなものですよ。ところが、ここに、遺偈に「虚堂」さんと書いたというのは、悪口言いながらも、やっぱり一番大事に思っていたんじゃないかなあ、という感じがするんですよ。

他に、「辞世」というものを作って、私はこっちの方が好きなんです。「辞世」という方が私は好きなんです。これは、『狂雲集』に在るんです。一寸読みます。「今宵、涙を拭う涅槃堂、伎倆盡くる時、前後忘す。誰か奏す、還郷の眞の一曲、緑珠、恨みを吹いて笛聲長し。」これも、あまり詳しい事を言うと時間がありませんので、簡単に言います、この世とは、「今宵」限りかと、「涅槃堂」で「涙を拭う」。「涅槃堂」というのは、修行道場で坊さんが病気になって、いよいよ御臨終に近い、もう危篤だということ、「涅槃堂」という所に入れられるんですよ。これはどうも、死刑宣告されたよう

なものです。昔の人は偉いものですな。そういう所へ入れられて、そこで「最後の覚悟せい」というのです。「今宵、涙を拭う涅槃堂」ですよ。もうこの世とは今宵限りか、と涅槃で涙を拭う。これ、良いでしょ。偉そうに言わないでしょ。「禅僧は生死を超越している」とか何とか言わない。

「伎倆盡くる時、前後忘す。」平生一生懸命に修行した腕前や境涯や手段や手だてとか、そんなものは役に立たない、一所懸命坐禅して、生死を超越しようと思つて頑張つてきたけれど、いざ、死ぬ前になったら、何にも役に立たない。何もかも忘れてしまった。

「誰か奏す、還郷の眞の一曲」一体誰が本当にわかれの一曲を奏でくれるのであろうか。死ぬ前に、私の為の眞の一曲、というのは、引導を渡してくれるかというような事にも成りますが。まあ、一曲と風流に言うわけです。

次の、「緑珠」というのは、中国の女性で、笛の名人です。これは、その、何か変なことに巻き込まれてとうとう、笛を吹いて二階から飛び降りて死んだ、という話がちゃんと在りまして、これをもつてくる場所は、一休さん、風流です。その「緑珠」、美しい女性で笛の名人ですよ。恨みを込めて吹いたんですね。彼女は騒動に巻き込まれて、右も左も行けなくなつて、遂に飛び降りた。そこまでは本当は解らないんだけど、一休さんはそう言うのですよ。「彼女は笛

を吹きながら、飛び降りたんだ」と、こう言うのですね。やっぱり一休さんらしい解釈ですけども、その笛の音は、何時までも長く耳に残っている。

「恨みを吹いて笛聲長し。」私の、最後のお別れに相応しい一曲は、「緑珠」という女性が恨みを込めて吹きながら死んだ。あの、笛の音だ。という風に一休さんは言ってるんです。

こういう、最期に対する一休さんの思いというのは、本当に、禅僧臭くないですね。抹香臭いのは御嫌い、とさつき読みましたが、その通りでして、あくまで、死ぬまで抹香臭いのは嫌ったということ御座います。

大変、お粗末なお話で御座いましたが、これで、私の話を終えたいと思います。